

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月30日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520373

研究課題名（和文）日中説話文学通史構築のための『太平広記』『容斎随筆』の比較説話学的研究

研究課題名（英文）The comparative study of "Taiping Guangji" and "Rongzhai Suibi" for construction of the history of Japan-China narrative literary

研究代表者

三田 明弘（MITTA AKIHIRO）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：00277865

研究成果の概要（和文）：

説話文学史上の最重要文献の一つである『太平広記』と、中国歴史故事集の金字塔である『容斎随筆』の編纂コンセプトを、明確にした研究である。七千余話に及ぶ『太平広記』説話を十八のカテゴリーに整理し、その全体像の把握を可能にするとともに、日本の説話集との編纂思想の違いとして儒教的要素があることを明らかにした。『容斎随筆』については、作者洪邁の生涯・思想・時代背景を調査し、作品全体を貫く潜在的主題として靖康の変の再検証があることを発見し、日本の歴史故事集とは異なる強い政治性があることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：

This research clarified the compilation concept of "Taiping Guangji" and "Rongzhai Suibi". About "Taiping Guangji", 7000 tales were classified into the category of 18 and the global image was clarified. About "Rongzhai Suibi", the theme which pierces through the work - re-verification of Jingkang Incident - was discovered by investigation of the author's profile. From those results, the difference in the feature of Japan and China narrative literary became clear.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：比較文学・説話文学・志怪小説・史話・太平広記・容斎随筆・洪邁・靖康の変

1. 研究開始当初の背景

(1) 日中説話文学通史構想

申請者は本研究の開始に至るまで比較文学的視点から『今昔物語集』を中心に『三国伝記』『唐物語』などの日本の説話集を分析し、また、日本の説話文学の成立に最も大きな影響を与えた中国の志怪小説集『冥報記』

についての論考を發表し続けてきた。その中で、日本の説話文学を、その源流たる中国の志怪小説から記述し始める日中説話文学通史とも呼ぶべき、国境を越えた文学史の必要性を強く感じるに至り、その執筆を研究上の大目標と措定した。

(2)これまでの研究

その一環として、博士論文においては六朝時代の中国仏教説話史の記述を試み、また平成19年度から21年度にかけては「日中説話文学史構築のための『法苑珠林』『夷堅志』の比較説話学的研究」という題目の科研費による研究を行った。この科研費研究課題では、その内包する仏教説話を中心に、『法苑珠林』と『夷堅志』を比較文学的見地から分析した。仏教という日本と中国の説話の直接的な接点に焦点を絞った研究を行ったのである。

(3)仏教説話から総合説話へ

『太平広記』『容齋随筆』を対象とした本研究は、『法苑珠林』と『夷堅志』を対象とした研究で培った方法を発展させたものであると同時に、より総合的な領域の説話を研究対象とする点に特色があり、仏教説話に限定した前回の研究と対をなすものである。それは、最大の仏教類書説話集である『法苑珠林』と最大の総合類書説話集である『太平広記』、宋代を代表する知識人である洪邁の二大著作である『夷堅志』（宗教的内容を多く含む）と『容齋随筆』（歴史故事を多く含む）という、前回と今回の研究対象となる作品の対照性にも明確に顕れている。従来より佛教説話偏重の傾向のある、日本の説話文学研究の可能性を大きく広げることが、今回の研究の大きな目的である。

(4)『太平広記』『容齋随筆』研究の重要性

『太平広記』は全500巻、7000余編の説話を内包し、宋初までの中国説話の集大成として、中国のみならず日本や朝鮮の文学にも大きな影響を与えてきた。しかし、その知名度とはうらはらに、独立した文学作品として『太平広記』を評価し、その全体像を論じる試みは、近年刊行された『《太平広記》的伝播と影響』（牛景麗 南開大学出版 2008.9）などごくわずかに過ぎない。

『容齋随筆』もまた、前代から宋までの歴史故事や政治・社会・経済などに関する考証、歴史人物に対する論評などで構成された宋代の代表的な随筆の一つとして名高く、しばしばその章段が引用される作品であるにも関わらず、この作品自体を対象とした研究は非常に少ない。

両作品の全容解明の説話文学研究における重要性と、それが日本でも中国でもいまだ十分果たされていないという事実は、本研究を企画した大きな要因である。

2. 研究の目的

中国説話文学の集大成『太平広記』及び宋代随筆の代表作『容齋随筆』は、どちらも著名かつ重要な作品でありながら、大部で内容も多岐にわたるため、その全体像はいまだ十分解明されてはいない。本研究は、『太平広

記』『容齋随筆』所収説話・故事の、悉皆調査及び比較文学的見地による分析を通して、両著の日中説話文学史における存在意義を明らかにすることを目的とした。

具体的には、目的は以下の2点に集約できる。

(1)『太平広記』所収説話の選択と排列の分析、『容齋随筆』所収故事の内容及び批評方法に対する分析による、両作品の全容解明。

(2)『太平広記』『容齋随筆』と『今昔物語集』『十訓抄』などの日本の説話集との比較研究による、説話集編纂方法及び説話型・モチーフにおける共通点と差異の解明。

3. 研究の方法

本研究は膨大な量の説話を効率的に分析・分類するために、コンピューターを利用して『太平広記』『容齋随筆』所収説話・故事データベースを作成し、データベースの活用による説話・故事の整理と、説話編纂の背景にある唐宋社会・文化状況の分析を通して、『太平広記』『容齋随筆』の全体構造を解明した。その上で、日本の代表的な説話文学作品との説話編纂方法及び説話モチーフの比較研究を行った。

また、『太平広記』『容齋随筆』の善本調査、近世を中心とする日本での受容状況調査、研究情報の収集を、国内及び海外において行った。

研究成果は逐次、学術誌等に論文として発表していった。

4. 研究成果

(1)第一部 『太平広記』の全体構造

『太平広記』は、漢から宋に至るまでに成立した説話から7000余話を類聚した、中国古代説話の集大成とも謂うべき500巻の説話集である。宋の太宗の勅命により五代後周の旧臣である李昉らによって太平興国二年（九七七）に編纂が開始され、翌太平興国三年に成立した。

『太平広記』は巻毎に所収説話の分類項目が見出しに立てられており、全体では以下の92項が立項されている。

神仙、女仙、道術、方士、異人、異僧、釈証、報応、徴応、定数、感応、讖応、名賢、廉儉、気義、知人、精察、俊弁、幼敏、器量、貢舉、銓選、職官、権幸、将帥、驍勇、豪侠、博物、文章、才名、儒行、楽、書、画、算術、卜筮、医、相、伎巧、博戯、器玩、酒、食、交友、奢侈、詭詐、諂佞、謬誤、治生、褊急、詼諧、嘲諷、嗤鄙、無頼、軽薄、酷暴、婦人、情感、童僕、夢、巫、幻術、妖妄、神、鬼、夜叉、神魂、妖怪、精怪、靈異、再生、悟前生、冢

墓、銘記、雷、雨、山、石、水、宝、草木、龍、虎、畜獸、狐、蛇、禽鳥、水族、昆虫、蛮夷、雑伝記、雑録

項目の物理的多さは、『太平広記』の全体構成を把握し難いものとしてきた。

しかし、内容の精査に基づくカテゴリーにより、92の項目は18のカテゴリーに分類することが出来る。(括弧内の数字は巻を示す)

①道教譚

神仙(1~55)、女仙(56~70)、道術(71~75)、方士(76~80)、異人(81~86)

②仏教譚

異僧(87~98)、釈証(99~101)、報応(102~134)

③運命譚

徴応(135~145)、定数(146~160)、感応(161~162)、識応(163)

④賢才譚

名賢(164)、廉儉(165)、気義(166~168)、知人(169~170)、精察(171~172)、俊弁(173~174)、幼敏(175)、器量(176~177)

⑤官職譚

貢挙(178~184)、銓選(185~186)、職官(187)、権幸(188)将帥(189~190)

⑥文武譚

驍勇(191~192)、豪侠(193~196)博物(197)、文章(198~200)、才名(201)、儒行(202)

⑦諸芸譚

楽(203~205)、書(206~209)、画(210~214)算術(215)、卜筮(216~217)、医(218~220)、相(221~224)

伎巧(225~227)

⑧遊興譚

博戯(228)、器玩(229~232)、酒(233)、食(234)

⑨処世譚

交友(235)、奢侈(236~237)、詭詐(238)、諂佞(239~241)、謬誤(242)、治生(243)、褊急(244)

⑩笑資譚

詼諧(245~252)、嘲諷(253~257)、嗤鄙(258~262)

⑪不徳譚

無頼(263~264)、輕薄(265~266)、酷暴(267~269)

⑫婦女・童子譚

婦人(270~273)、情感(274)、童僕(275)

⑬巫覡譚

夢(276~282)、巫(283)、幻術(284~287)、妖妄(288~290)

⑭鬼神譚

神(291~315)、鬼(316~355)、夜叉(356~357)、神魂(358)、妖怪(359~367)、精怪(368~373)、靈異(374)

⑮生死譚

再生(375~386)、悟前生(387~388)冢墓(389~390)、銘記(391~392)

⑯自然譚

雷(393~395)、雨(396)山(397)、石(398)、水(399)宝(400~405)、草木(406~417)

⑰動物譚

龍(418~425)、虎(426~431)、畜獸(446)、狐(447)、蛇(456~459)、禽鳥(460~463)、水族(463~472)昆虫(473~479)蛮夷(480~483)

⑱雑譚

雑伝記(484~492)、雑録(493~500)

(2)連鎖する主題

92の分類項目整理した18のカテゴリーは、各カテゴリー間で主題が前後相関連しつつ、連鎖していることが看取される。

その各カテゴリー間の主題の連鎖は、次のように説明することが出来る。矢印の横に記したのが、前の話群から次の話群への移行を促す連結概念である。

①道教譚

↓道仏二教

②仏教譚

↓冥界の理

③運命譚

↓天賦の資質

④賢才譚

↓賢良の任官

⑤官職譚

↓文官と武官

⑥文武譚

↓諸々の技能

⑦諸芸譚

↓遊芸

⑧遊興譚

↓社交

⑨処世譚

↓人間の滑稽さ

⑩笑資譚

↓輕侮の対象

⑪不徳譚

↓小人

⑫婦女・童子譚

- ↓ 周縁的存在
- ⑬ 巫覡譚
- ↓ 民間信仰
- ⑭ 鬼神譚
- ↓ 死者と生者
- ⑮ 生死譚
- ↓ 人間を内包する外界
- ⑯ 自然譚
- ↓ 自然万物
- ⑰ 動物譚
- ↓ 未分類説話
- ⑱ 雑譚

各カテゴリーを志怪・志人説話のスタイルから論じると、①道教譚から③運命譚は志怪小説であるが、④賢才譚から⑫婦女・童子譚までは、その内容や出典から志人小説に分類されるものであり、⑬巫覡譚から⑰動物譚は再び志怪小説となる。⑱雑譚は巻484から巻492の「雑伝記」は志怪・志人小説とは異なる伝奇体の小説群であり、巻493から巻500の「雑録」は志人小説によって構成されている。

つまり、18のカテゴリーは、①道教譚から③運命譚、④賢才譚から⑫婦女・童子譚、⑬巫覡譚から⑰動物譚、⑱雑譚と、説話のスタイルや内容から、大きく四つのジャンルに分類することが出来る。

I 宗教類

道仏儒三教に関わる説話（志怪小説群）

①道教譚②仏教譚③運命譚

II 世俗類

世間の人々の言行に関わる説話（志人小説群）

④賢才譚⑤官職譚⑥文武譚⑦諸芸譚⑧遊興譚⑨処世譚⑩笑資譚⑪不徳譚⑫婦女・童子譚

III 霊怪類

怪異現象に関わる説話（志怪小説群）

⑬巫覡譚⑭鬼神譚⑮生死譚⑯自然譚⑰動物譚

IV 雑類

未分類説話（伝奇・志人小説群）

⑱雑譚

すなわち、全体としての『太平広記』は、小説のスタイルで言えば「I 宗教類」「III 霊怪類」という志怪小説群に、「II 世俗類」の志人小説群が挟まれ、伝奇・志人小説で構成される「IV 雑類」が末尾に付随するという構造になっているのである。

内容で論じれば、人間世界を描く「II 世俗類」を中心に、人間より上位の道教・仏教の神仏をテーマとする「I 宗教類」、人間より下位の鬼や動物に関する「III 霊怪類」を前後に配置していることになる。

(3) 『今昔物語集』『古今著聞集』との比較

『今昔物語集』が仏法と世俗の二つの世界によって構成されていることはよく知られているが、現実的な世俗説話と幽玄なる宗教説話を対比させる発想は、すでに『太平広記』に見られるものなのである。『今昔物語集』が、「II 世俗類」「III 霊怪類」に相当する部分を明確に区別していない。『太平広記』と『今昔物語集』の、この構造上の差異は、『太平広記』は道仏二教に加えて、世俗の世界を統括するコンセプトとしての儒教があったのに対し、『今昔物語集』は世俗部を、非仏教的説話群としてしか把握できなかったことに由来するであろう。

『古今著聞集』は、その構成に『太平広記』の影響があった可能性が指摘されている説話集であるが、やはり、その構成は『太平広記』ほど明確な階層性を有していない。これも儒教あるいはそれに代わりうる、世俗世界を秩序化する思想の欠落が要因であると考えられるのである。

(4) 第二部 『容斎随筆』を貫く思想

洪邁は字は景廬、号を容斎と称した。饒州鄱陽（江西省上饒市鄱陽県）の人である。宣和七年（1123）に士大夫の家に生まれ、嘉泰二年（1202）に八十歳で没した。

父の洪皓は、南宋の建国後間もない建炎三年（1129）に金国に二皇帝の返還交渉の使者として赴き、そのまま金に十五年に涉って抑留され、紹興十三年（1143）によりやく帰国することを得た。金に在る間、様々な危機や執拗な任官の要求に見舞われつつも節を曲げることなく、両国の講和成立に際して帰還を果たし、「宋の蘇武」と称された。著書に金での見聞を記した『松漠紀聞』がある。

洪邁は洪皓の三男であるが、二人の兄も優秀で世に「三洪」と称された。兄弟たちは官界で活躍したのみならず、学術方面でも、長男の洪适は金石学において、次男の洪遵は古銭研究において、それぞれ大きな足跡を残した。そして洪邁は『夷堅志』と『容斎随筆』という宋代を代表する志怪小説と随筆を執筆した。

宋の長年の宿敵であった遼を滅ぼした金が、宋の弱体化を見抜き、靖康元年（1126）と二年（1127）の二度にわたって、宋の首都である開封を囲み、陥落させた挙げ句、上皇の徽宗と皇帝の欣宗を拉致し、宋を滅亡させた靖康の変は、洪邁が四歳から五歳にかけての時期の出来事であった。宋はその年の内に難を逃れた康王が即位して再興されたが、以後、金が遼に取って代わって宋を苦しめることになる。

この金の圧力は洪邁の個人史にも暗い影を落としている。七歳の時に父が金に抑留され、ようやく帰ってきたのは洪邁が二十一

歳の時であった。その間、十六歳の時には母が亡くなっている。また、紹興三十二年（1162）、四十歳の時に洪邁は使者として金に赴いたが、その際に対等国の使者ではなく、陪臣の礼を執らされ、帰国後、君命を辱めたとして弾劾された。

洪邁の靖康の変に対する無念の思いと当時の朝廷に対する批判は、『容齋隨筆』にも繰り返し現れる。一例を挙げると、「容齋續筆」巻第一の「存亡大計」は、正しい判断に基づく献策を聞き入れなかった君主の滅びた例を、三国から五代十国までの各時代から列挙した一段であるが、その最後に、洪邁は次のように記している。

わが大宋国の靖康の難においても、金軍は開封を襲った際、孤軍で深く侵入し、後から来る援軍もなかった。この隙に派兵して敵の後方である燕を突くという妙計を進言する者もいたが、天が禍を宋に下すと決めていたのであろうか、計は採用されず、後悔しても及ばないこととなった。じつに嘆かわしいことである。

（皇家靖康之難、胡騎犯闕、孤軍深入、後無重援。亦有出奇計乞用師搗燕者。天未悔禍、噬臍弗及。可勝嘆哉。）

この章段では、靖康の変における敗北を、宋の内部における正論が封殺されるという組織の問題として論じているが、『容齋隨筆』のなかで洪邁は様々な側面から靖康の変を検証している。そして、他の時代を扱った歴史評論の章段においても、その背後にあるのは、宋金問題に対する意識であった。

靖康の変を起点とする親子二代にわたる苦悩と歴史の不条理への問いかけが、『容齋隨筆』の叙述の核となっているのである。

(6) 忠臣と奸臣の時代

『容齋隨筆』中の歴史評論の例として「安史の乱」を取り上げた章段を見てみると、敵である安祿山や史思明に関する分析は、安祿山の拠った燕が軍事的に有利な場所ではない、という程度で、専ら唐の君臣各人の言行に焦点が当てられている。特に忠臣の称揚と、奸臣の弾劾に関する章段は分量も多く、筆致も力強い。

その社会的背景としては、洪邁が生きたのは、理学が盛んになりつつある風潮の中で忠臣や奸臣という概念が強く意識されるようになった時代であった、という点が挙げられる。

理学の発展を領導した朱熹が誕生したのが建炎四年（1130）であり、洪邁8歳の時である。洪邁と朱子は同時代人であった。

洪邁と朱子には、もう一つ重要な共通点がある。どちらも、その父親が強硬な対金非妥協派であり、対金講和派にして時の権力者であった秦檜と対立したために、不遇な晩年を

送ったことである。

洪邁の父親、洪皓は、国難の時期に金での長い抑留に耐えて宋への忠節を貫き通し、宋の蘇武とさえ賞賛されたが、秦檜によって饒州（江西省）や英州（広東省）に左遷され、ついに返り咲くことは無かった。紹興二十五年（1155）に秦檜は死んだが、皮肉にもそれは洪皓の死の翌日であった。

洪皓と秦檜は同年に死去したのみならず、進士に合格したのも同年であった。しかも、どちらも金での抑留生活を経験している。しかし、一方は売国的講和を行ったことがむしろ功となって権勢を極め、一方は敵に媚びること無く、国の名誉を守ったにも関わらず、弾劾され、辺境に左遷されて亡じた。忠臣と奸臣の典型と、その運命の不条理さは、まさに洪邁の眼前にあったのである。

救いがあるとすれば、それは後人の評価に因る名誉回復と断罪に委ねるしかない。

「容齋続筆」巻十五「李林甫秦檜」は、ともに賢臣能吏を嫉妬した狭量の宰相であった李林甫と秦檜を比較するという章段であるが、その中で洪邁は、秦檜を李林甫にさえ劣る人物として、その人格を厳しく批判している。

父の死から七年後、洪邁が金に使者として赴き、宋の名誉を守るためのやむを得ない譲歩として書面に自らを陪臣と表記したことが、帰国後に批判を被ることとなった。忠義の行動が歪曲され、不当な評価を受ける不条理を、自らも味わうこととなった。

『容齋隨筆』における、安史の乱関連の人物評価へのこだわりには、父子二代にわたる忠臣としての誇りという個人的事由と、理学思想の流行という社会背景から理解できるのである。

(7) なぜ洪邁は曹操を評価するのか

『容齋隨筆』には、曹操に言及した章段が少なからず見られ、この複雑な人物に洪邁が強い関心を抱いていたことが看取される。

後漢末の群雄割拠の状態に終止符を打ち、三国鼎立という新局面の中心人物となった曹操は、正史『三国志』では全編の筆頭に立伝されているが、明代の白話小説『三国志演義』では敵役として描かれ、民間では悪人のイメージが定着した。正史『三国志』にみられる三国のうち魏を正統とする歴史観は、北宋の司馬光の編纂した『資治通鑑』にも継承されたが、南宋の朱熹による『通鑑綱目』では蜀を正統とする歴史観が示されており、その史観が『三国志演義』にも採られている。南宋こそ歴史人物としての曹操像の大きなターニングポイントであり、朱子が後世に与えた影響は大きい。

朱子と同時代人であった洪邁は、曹操という人物をどのように理解し、評価していたの

であろうか

洪邁は、曹操を一方で君子が口にするのも汚らしい怪物と呼びながらも、一方ではその非凡な人材活用の手腕が曹操の勝利を必然のものとしていた、ということ冷静に分析し、高く評価している。洪邁の曹操への関心は多層的であり、矛盾しているようでもある。洪邁が、士大夫の倫理に悖る曹操を一方で高く評価する理由は『容齋隨筆』中に列挙された曹操の事績に明確に示されている。『容齋隨筆』の挙げる事績は、その多くが北方・西方の軍閥的諸将や少数民族等に対する辺境対策に関するものである。これが、洪邁の曹操に対する関心の方向性を示している。常に金という強敵を意識していた洪邁は、曹操の事績を研究することを通して、対金戦略の示唆を得ようとしていたのである。

『三国志』は、曹操のみならず、劉備・関羽・諸葛亮・孫権・周瑜など、論ずるに足る人物には事欠かない史書である。しかし、『三国志』の人物群のうち『容齋隨筆』において、何度も言及され、その行動が詳細に分析され、評論されているのは、曹操のみである。それは、『容齋隨筆』が、純粹に過去の歴史事実を検証・考察することだけを目的とした隨筆ではなく、洪邁の抱えている同時代的問題意識と相通じる点のある過去の事象を分析し、同時代の問題を考察する上での参考とする、という指向性の顕著な作品だからである。そして洪邁における、最も重要な同時代の問題とは、靖康の変以来、金によって宋が味わわれている屈辱的状況の解決に他ならない。

諸葛亮は、劉備の遺志を継ぎ、漢王室復興を賭けて、暗愚な劉禪に忠義を尽くしつつ、何度となく魏討伐の征戦に赴いた。その行動は、儒教的倫理の観点からは非の打ち所のないものであったが、実質的に漢を復興させることは出来ず、結局は蜀の国力を疲弊させるに過ぎなかった。

建前を超えた、実質的な現状の打開を目指す時、論ずべき人物として浮上するのは、やはり曹操であったのである。

奸臣と忠臣という建前論にとどまらず、現実的な側面からの評価を入れる柔軟性が、『容齋隨筆』の史話の記述を深みのあるものにしてしているのである。

(8) 『十訓抄』『古事談』との比較

日本における歴史故事を集成した説話集としては『十訓抄』『古事談』等がある。しかし、これらの説話集における歴史故事の引用は、一般的な道徳や教訓の先例として行われることが多く、『容齋隨筆』にみられるような、史実を同時代問題意識から批評する高度な政治性には乏しいと言わざるを得ない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 三田明弘、高嶺を巡る説話と言説－『冥報記』前史－、日本女子大学紀要 人間社会学、査読無、21号、2011、p133～142
- ② 三田明弘、『夷堅志』「靖康の変」関連説話考日本女子大学大学院人間社会研究科紀要、査読無、17号、2011、p144～152
- ③ 三田明弘、『容齋隨筆』における安史の乱、水門 言葉と歴史、査読無、24号、2012、p83～93
- ④ 三田明弘、『法苑珠林』「慈悲篇」の説話にみる仏教的身体観、日本語日本文学(輔仁大学)、査読有、38輯、2012、p19～30
- ⑤ 三田明弘、『太平広記』の全体構造における笑話の意味日本女子大学紀要 人間社会学、査読無、23号、2013、p119～128
- ⑥ 三田明弘、『容齋隨筆』における曹操像日本女子大学大学院人間社会研究科紀要、査読無、19号、2013、P215～222

〔学会発表〕(計1件)

- ① 三田明弘、『法苑珠林』『太平広記』における神異僧伝とその日本への影響、和漢比較文学会第3回特別例会、2010.9.3、台湾大学(台湾)
- ② 三田明弘、『冥報記』と『冥報拾遺』、和漢比較文学会第4回特別例会、2011.9.3、西北大学(中国)
- ③ 三田明弘、『法苑珠林』説話にみる仏教的身体観、2011年度輔仁大学日本語文学系国際研討會「文化中的身體論述」、2011.11.19 輔仁大学(台湾)
- ④ 三田明弘、『容齋隨筆』における歴朝人物評、水門の会東京例会「仏教文学研究の軌跡」、2012.1.8、大東文化大学
- ⑤ 三田明弘、説話集の構造における笑話の意味－『太平広記』と『今昔物語集』－和漢比較文学会第5回特別例会、2012.9.3、台湾大学(台湾)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三田 明弘 (MITTA AKIHIRO)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：00277865

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし